

ことばの教育としての小学校英語教育

Elementary School English Education as Language Education

浦谷 淳子

1. はじめに

2002年、小学校学習指導要領の総則における「国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等を行う時は（略）」という記述をきっかけにして、公立小学校で外国語学習が始まった。

その後2011年の小学校学習指導要領では「外国語を通じてコミュニケーション能力の素地を養う」ことを目的として、5、6年生に週に1コマ（小学校の授業における1コマは45分間）の外国語活動の時間が設置された。

2020年完全実施の次期小学校学習指導要領（以下、次期学習指導要領）では3、4年生に外国語活動（領域）が週に1コマ、5、6年生に外国語科（教科）が週に2コマ設定されると同時に、国語と外国語の連携が求められている。例えば、次期小学校学習指導要領解説国語編（以下、解説国語編）には

指導に当たっては、外国語活動及び外国語科における指導との関連を図り、相互に指導の効果を高めることが考えられる。(p21)

言語能力の向上を図る観点から、外国語活動及び外国語科など他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。(p159)

国語科と同様、言語を直接の学習対象とする外国語活動及び外国語科との連携は特に重要なものとなる。(p159)

と記されており、小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編（以下、解説外国語活動・外国語編）には

日本語の音声の特徴を意識させながら、外国語を用いたコミュニケーションを通して、日本語の使用だけでは気付くことが難しい日本語の音声の特徴や言葉の仕組みへの気付きを促すことにより、日本語についての理解を深めることができる。さらに、このことは言葉の豊かさに気付かせ、外国語学習への意欲の向上や、高学年の外国語科で育成を目指す資質・能力の向上にも資すると考えられる。(p14)

と記されている。

また、次期中学校学習指導要領解説外国語編の3指導計画の作成と内容の取扱いには、以下の記述がある。

英語と日本語の言語的類似性や創意性に目を向けて、両言語を対比する形で英語指導に当たることも、言語的感性を養うことを助け、英語使用に際しての気付きを促す上で有効である。また、外国語教育を通じて日本語の特徴に気付いたりするなど、言葉の働きや仕組みなどの言語としての共通性や固有の特徴への気付きを促すことを通じて相乗効果を生み出し、言語能力の効果的な育成につなげていくことが重要である。(p94)

さらに次期高等学校学習指導要領外国語編・英語編の第3章英語に関する各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱いには、以下の記述がある。

国語教育と英語教育は、学習の対象となる言語は異なるが、ともに言語能力の向上を目指すものであるため、共通する指導内容や指導方法を扱う場面がある。各学校において指導内容や指導方法等を適切に連携させることによって、英語教育を通して国語の特徴に気付いたり、国語教育を通して英語の特徴に気付いたりするなど、日本語と英語の言語としての共通性や固有の特徴への気付きを促すことにより、言語能力の効果的な育成につなげていくことが重要である。(p127)

このように、小学校では国語と外国語の両面から、そして、中学校と高等学校の外国語からも「言語能力の向上を図る観点」「ことばへの気付き」「国語と外国語の連携」の大切さを述べており、次期学習指導要領で強調されていることが明確である。

さて、学習指導要領では外国語活動・外国語と表記されており、筆者も様々な外国語を知ることが小学校教育には必要であると考えるが、現状として英語を採用している小学校が多く、解説外国語活動・外国語編でも「英語を取り扱うことを原則とする」(p54)と記載されているため、これ以降英語と表記する。

次期学習指導要領で強調されている国語と英語の連携について、「国語と英語の連携の大切さはわかるけれど、具体的にどのような学習活動を展開すればいいの?」「ことばへの気付きってどんなこと?」「国語ですもの、英語ですもの?」といった声が小学校の先生から聞こえてくる。そこで、国語と英語との連携を念頭に置き、ことばへの気付きを土台にしたことばの教育としての小学校英語教育を提案する。外国語を使って会話をすることを目的とするのではなく、国語科と共に、ことばの教育としての役割を担う小学校英語教育を提案することが、悩んでおられる小学校の先生への

答えになることを願い本論で述べる。

2. 世界の中の英語

「1. はじめに」で、英語に限定せず、様々な外国語に触れさせることが望ましいと述べた。現状の小学校外国語教育で英語を中心に学ぶことは否めないが、文部科学省が提供している教材『Let's try!1, 2』『We can!1, 2』の内容は英語であるため、これらの教材を使用しているだけでは、児童が、外国語＝英語だと勘違いしてしまう恐れがある。

そこで、時には文部科学省の教材を補充する形で、英語だけが存在するのではなく、世界には6,000～7,000の言語（Ethnologue Languages of the World2017）があることや、表1で分かるように、世界で一番たくさんの人が使用しているのは英語ではなく中国語であり、2位がスペイン語、英語は3番目であることを児童に知らせることが大切である。

また、日本語はパラオ共和国アングウル州で公用語（公の場で使用されることが正式に認められている言語）の一つになっているそうであるが、母語として使われている国は日本だけであり、日本語のように母語として一つの国だけで使われている言語は多くないこと、英語は106もの国々で使われていることも大切な知識であり、児童が日本語や英語を含めた世界の言語に関心を持つきっかけになると考える。

表 1

	使われている国	母語使用者(百万人)				
1	中国語普通話	1	898	12 韓国語	7	77.2
2	スペイン語	31	437	13 ドイツ語	27	76.8
3	英語	106	372	14 フランス語	53	76.1
4	アラビア語	57	295	15 テルグ語	2	74.2
5	ヒンディー語	5	260	16 マラティ語	1	71.8
6	ベンガル語	4	242	17 トルコ語	8	71.1
7	ポルトガル語	13	219	18 ウルド語	6	69.1
8	ロシア語	19	154	19 ベトナム語	3	68.1
9	日本語	2	128	20 タミル語	7	68
10	ラーンダ語	6	119	21 イタリア語	13	63.4
11	ジャワ語	3	84.4	22 ペルシャ語	30	61.9
				23 マレー語	16	60.8

(Ethnologue Languages of the World2017Table3. Languages with at least 50 million first-language speakers を参考に筆者作成)

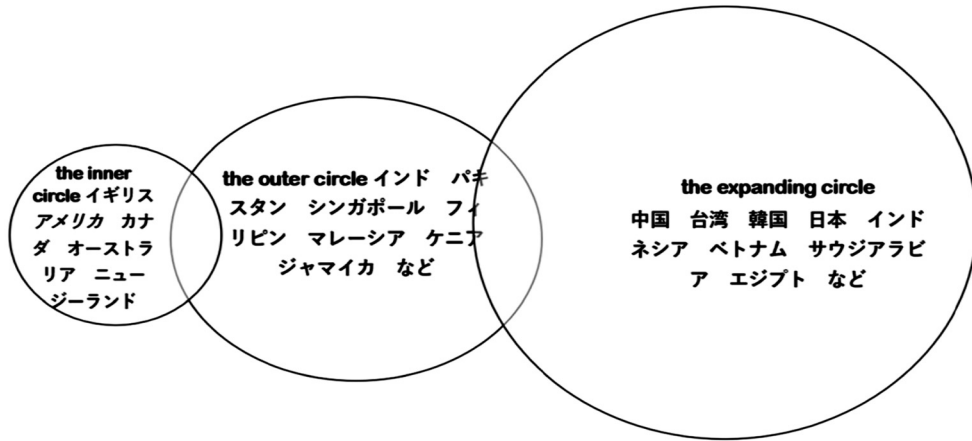


図 1

(Kachru (2009)、道本・中村(2010)、久保田 (2018) を参考に筆者作成)

また、英語はアメリカとイギリスだけで使われていると勘違いしている児童がいるかもしれない。そんな時には、図 1 を見せて、world Englishes という Kachru (2009) の考えを紹介することは小学校高学年児童の知的好奇心を満足させるであろう。world Englishes とは英語の変種を 3 つの円に分類するもので、the inner circle は英語を公用語または同等の地位を持つ国でイギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド。the outer circle はアメリカやイギリスの旧植民地でインド、パキスタン、シンガポール、フィリピン、マレーシア、ケニア、ジャマイカなど。the expanding circle は英語が外国語として学ばれている国で中国、台湾、韓国、日本、インドネシア、ベトナム、サウジアラビア、エジプトなどである。

3. ことばへの気付きの活動

「ことばへの気付き」とは、大津 (2009) が述べているように、「ことばの仕組みや働きを対象化し、気にとめ、さらに意識すること」であると考えられる。「1. はじめに」で述べたように、次期学習指導要領には「気付き」に関連した文言が多くみられる。

そして、「聞き手にわかりやすく伝わるように複数あるものの順番を決めたり、選んだりして、伝えたいことを整理して話す言語活動が考えられる。」(解説外国語活動・外国語編 p126) のように国語と英語の連携について、単元設定の工夫の指摘もある。しかし、この内容が『Let's try!1,2』『We can!1,2』に反映していないため、どのタイミングで上記の活動や指導をすればよいのだろうか、現場の先生は戸惑っているのである。

そんな中、現場の先生方が独自で工夫し、実践を重ねている。

岩坂・吉村（2015）は児童の認知能力やメタ言語意識を高めることを目標とした「言語・文化」の活動内容・母語を中心として行う「ことばへの気付き」活動と、複数の言語を同時に扱う多言語活動を通して行う「言語への目覚め活動」とを統合し、言語意識の育成を目指した。実践例として、多言語による月のいい方から語構成の規則を発見することを挙げ、母語である日本語を客観的に分析し、英語を含む多様な言語活動を経験することを通じて言語の多様性に触れることこそが、今後子どもたちのことばの教育において最も重要な要素であると結論付けている。そして、実践事例を増やすことと国語科の中でできる言語活動の作成が課題であるとしている。

筆者の2009年の実践について述べる。2009年に公立小学校6年生児童28人の外国語活動の授業で、15分間程度のことばへの気付き（9月複合語の短縮、10月オノマトペ、11月複合語の語順と同音異義語、12月絵記号、9月から12月世界の言語）の活動を取り入れた。その実践では、ほとんどの児童が英語学習に興味を持ち、興味を持たない児童は少数であった。さらに、2009年5月に英語に対して苦手意識を持つ児童が全体の43%であったが、この実践後の2009年12月には英語に対する苦手意識を持つ児童は0%という結果が得られた。（浦谷2010）

この実践は実施期間も該当児童数も小さいものではあるが、小学校英語教育が、ゲーム中心のレクリエーション的な活動中心の教育や英会話教育ではなく、ことばへの気付きを土台にしたことばの教育であるべきという示唆であると考えている。

しかし、残念ながら岩崎・吉村同様、実践例が少ないことが課題である。そこで、国語の教科書と当時文部科学省からの教材『Hi, friends! 1』（以下HF1）『Hi, friends! 2』（以下HF2）を連携させたことばへの気付きの活動案を提案する。（表2）。

一段目は、HF2のLesson4やLesson8でpolice station, police officerという言い方を知った時に、国語の漢字の熟語の成り立ちと同じで、後ろに来る語で意味が決定されることに気付かせる内容である。

二段目は、国語で外来語の学習をするときに、カタカナ語がすべて英語由来ではないことに気付かせたり、外国でも使われている日本発信のことばに着目させ、その理由について考えさせたりする活動案である。

三段目は、国語で敬語の学習をするときに、英語にも丁寧な言い方があることに気付かせ、どんな場面でどんないい方をするのか適切であるかについて考えさせる活動案である。

ところで、2018年度～2019年度の移行期の教材として文部科学省が『We can! 1, 2』を用意している。しかし、移行期間中のため現場では『Hi, friends! 1, 2』を使用しているところも多く、『We can! 1, 2』のみの使用であっても、『HF1, 2』と重なる内容が多いため表2で活用できる部分があると考えている。

表2 『Hi, friends! 1, 2』と5.6年生国語教科書との連携案

言葉の特徴やきまりに関する事項	5年国語科 (光村図書)	6年国語科 (光村図書)	HF1	HF2	ことばへの気づき
(エ) 語句の構成、変化などについての理解を深め、また、語句の由来などに関心をもつこと		熟語の成り立ち p 98		Lesson4 police station Lesson8 (police officer)	<ul style="list-style-type: none"> ・意味が対になる漢字の組み合わせの学習の時に、英語でもsunrise sunsetのような対のことばがあることを紹介する。 ・二字の語の後ろに一字を加えた熟語の学習の時に、英語でもpolice officer police stationのように後ろのことばで意味がかわることを紹介する。
	和語・漢語・外来語 P100,101	言葉について考えよう p 180,181	Lesson7 What's this?		<ul style="list-style-type: none"> ・英語が語源のカタカナ語マフラー、チョコレート、コート、ノート、エプロンなどの英語での言い方を紹介する。 ・カタカナ語の語源が英語だけではないことを 国語辞典を使って確認する。例ランドセル ・ひらがなで書くので、日本語だと思っていることばの中に、外来語があることを紹介する。例かるた ・日本発で外国でも使われていることばの紹介。例judo sushi
(ク) 日常よく使われる敬語の使い方に慣れること	敬語p76,77	伝えるにくいことを伝える p 48,49 生活の中の敬語 p100,101	Lesson6 What do you want? Lesson9 What would you like?		<ul style="list-style-type: none"> ・英語にも相手を気遣ったいろいろな言い方があることを紹介する。

4. ランゲージアーツ (language arts)

これまで岩崎・吉村、浦谷の実践及びことばへの気づき活動案(表2)について述べてきたが、国内にことばへの気づきの実践例は少なく、活動例を提示している書籍も少ない『ことばの力を育む』(大津由紀雄・窪園晴夫 2008)に、ことばへの気づきの活動例が掲載されているが、数が少なくことばの教育として体系的であるとはいえない。

そんな中、つくば言語技術研究所の三森ゆりか氏は三森(2013)でヨーロッパ、北米、南米、アジア(英語圏)、中近東、アフリカなどで実施されているランゲージアーツ (language arts) について以下の様に述べている。

言語技術は、思考と表現の方法論を具体的なスキルとして指導する総合的な体系であり、その目標は人間形成にあります。どのような人間を形成するのかといえば、概ね次のような人間です。

①自立してクリティカル・シンキングができる(自分の力で物事を論理的、分析的、多角的に検討し、適正な判断を下す能力を持つ)

- ②自立して問題解決をする能力を持つ
- ③考察したことを口頭・記述でじぎいに表現できる
- ④自国の文化に誇りを持つ教養ある国民を育てる（「教養」には「人間味豊かな人間」の意が含まれる）（pp.6-7）

また、パメラ・J・ファリスとドナ・E・ウェルディッヒ（2016）は

ランゲージアーツとは、聞く（listening）、話す（speaking）、読む（reading）、書く（writing）、考える（thinking）、視覚的に捉える（viewing）、視覚的に表示する〔ビジュアル・プレゼンテーション〕（visually representing）という活動から構成される、日常に欠かせないコミュニケーション・スキルです。（p5）

と述べ、ことばを上手に使える生徒について以下の7点を挙げている。

- 1. 自分のことが表現できる
- 2. 耽美的意識をもってことばを使う
- 3. 周りとの協力しながら探求する
- 4. ストラテジーとしてことばを使う
- 5. 創造的にコミュニケーションする
- 6. 内省的に解釈する
- 7. しっかり考えたうえで応用する（p28）

さらに、Spectrum社からLanguage Artsというワークブックが学年に応じてGrade1, 2, 3・・・のような形で出版されている。Grade8の内容はGrammar、Mechanics、Usage、Writer's Guideで、他のGradeの内容もほぼ同様である。

このように、ヨーロッパなどでは、ランゲージアーツという考え方や授業が確立している国がある。しかし、日本ではまだほとんどなじみがない。三森やパメラとドナが言うところのランゲージアーツの内容の一部が日本の学校における国語教育の中に含まれていると考えられるが、ランゲージアーツの概念も学習過程や内容も確立していない。

5. ことばの教育（ことば科）の提案

これまで、ことばの教育の国内外での取り組みについてながめ、日本においては、ことばの教育が体系化されていないことを述べた。

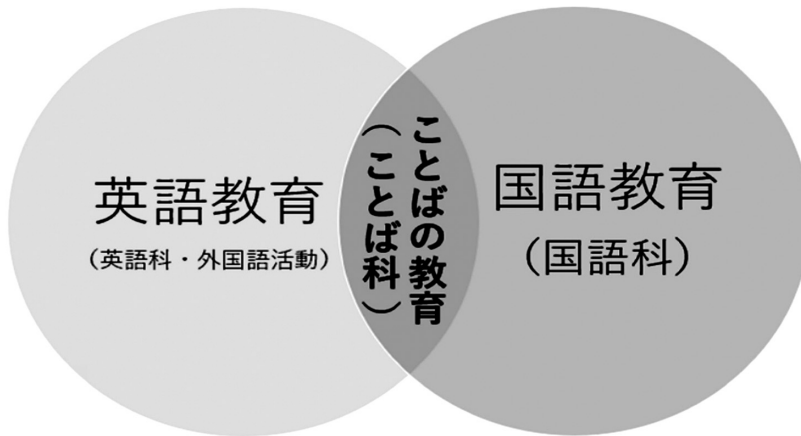


図2

そこで、国語教育でも英語教育でも共通して扱う、図2の真ん中の重なる部分を日本における「ことばの教育」と名付ける。その内容は、ことばへの気付きや国語と英語の連携を主とする。

さらに、上で述べたことばの教育を「ことば科」と名付ける。ことば科は国語科と英語科の両方に含まれており、どちらの授業でも行われるべき内容で、毎時間の国語や英語の授業の一部または全てとして行われる。ことば科以外の部分は、国語や英語の内容を重視した学習内容となる。

ただし、ことばの教育（ことば科）の内容となる、ことばへの気づきや国語と英語の連携の活動事例が少ないため、3で述べた実践案を充実させ、諸外国のランゲージアーツを参考にし、ことばの教育（ことば科）の体系化を図ることは喫緊の課題である。

さらに将来的には図3のように、ことば科が独立し、全教科の中心、すなわち小学校教育全体の核となることを期待している。ことば科があれば、「国語ですか？英語ですか？」という小学校の先生の問いに「ことば科で」と答えることができるのである。

ところで、次期学習指導要領では、小中高全体を通して「見方・考え方」「主体的・対話的で深い学び」が貫かれている。

外国語によるコミュニケーションにおける「見方・考え方」とは、外国語によるコミュニケーションの中で、どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかという、物事を捉える視点や考え方であり、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること（解説外国語活動・外国語編 p11）

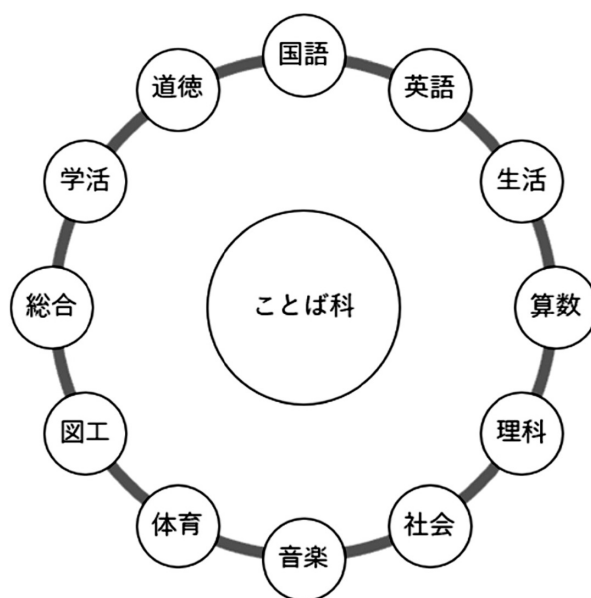


図 3

と、記述されており、外国語の見方・考え方で考えを再構築することが求められているのである。ことば科におけることばの教育は、考えを再構築するのに有効であり、主体的・対話的で深い学び支える土台になると考える。

6. おわりに

2020年の次期小学校学習指導要領では、ことばへの気づきや国語教育と英語教育との連携が強調され嬉しく思っている。ことばへの気づきを土台にした、ことばの教育としての小学校英語教育で、ことばに興味（面白さ、快適さ、こわさ、もどかしさなど）を持ち、母語である日本語を再認識する。そしてことばを適切に使用しながら相手と伝え合おうとする。このような小学校英語教育におけることばの教育によって、ことばで理解し合えないことが原因で起こるトラブルを解決する力を育成したいと願っている。

ことばの教育で、外国語である英語を理解しようとする態度が生まれ、同時に母語である日本語を再確認し、英語であれ日本語であれ、ことばを大切に適切に使おうとする気持ちが高まることを期待している。そして、ことばを大切に使うことは他者を思いやることにつながり、その結果現在の学校教育の深刻な問題のひとつであるいじめの解消につながることを心より願っている。ことばの教育は人権教育であり、平和教育である。

引用・参考文献

- Ethnologue 〈<https://www.ethnologue.com/>〉 2017年9月22日アクセス
- Braj B. Kachru (1991) *The Spread, Functions, and Models of Non-Native Englishes*. Univ of Illinois Pr.
- Braj B. Kachru, Y., & Nelson, C. (Eds.) (2009) *The handbook of world Englishes*. Oxford, UK: Blackwell.
- Language Arts, Grade1,2,3,4,5,6,7,8 (2014) Spectrum
- バメラ・J・ファリス、ドナ・E・ウェルデリッヒ (2016)『ランゲージアーツ 学校・教科・生徒をつなぐ6つの言語技術』玉川大学出版部
- 文部科学省 小学校学習指導要領・解説(2002、2011、2017)
- 文部科学省 中学校学習指導要領解説外国語編(2017)
- 文部科学省 高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編(2018)
- 今井むつみ(2013)『言葉の発達の謎を解く』筑摩書房
- 岩坂泰子・吉村雅仁(2015)『「言語意識」と『多様性に対する寛容な態度』の育成に向けたことばの教育—奈良教育大学附属小学校における『言語・文化』授業』次世代教員養成センター研究紀要(pp.101~106)
- 浦谷淳子(2010)「言語意識を高める小学校外国語活動」滋賀大学大学院教育学研究科教科教育専攻英語教育専修修士論文
- 大津由紀雄・窪園晴夫(2008)『ことばの力を育む』慶応義塾大学出版会
- 大津由紀雄編著(2009)『はじめて学ぶ言語学』ミネルヴァ書房
- 金沢優(2018)『もしも高校四年生があったら、英語を話せるようになるか』幻冬舎
- 川添愛(2017)『働きたくないイタチと言葉がわかるロボット』朝日出版社
- 久保田竜子(2018)『英語教育幻想』ちくま新書
- 三森ゆりか(2003)『外国語を身につけるための日本語レッスン』白水社
- 三森ゆりか(2013)『大学生・社会人のための言語技術トレーニング』大修館書店
- 行方昭夫(2014)『英会話不要論』文春新書
- 西崎有多子(2016)『国語と英語の連携を意識した授業を考える』三恵社
- 沼津市教育委員会(2018)『みらいをひらく言語科副読本小学校1・2年、3・4年、中学』
- 野矢茂樹(2017)『大人のための国語ゼミ』山川出版社
- バトラー後藤裕子(2015)『英語学習は早いほど良いのか』岩波新書
- 平田オリザ(2012)『わかりあえないことから』講談社現代新書
- 本名信行(2016)『世界の英語を歩く』集英社新書
- 道本ゆう子・中村真規子(2010)『「言語市場」における英語(Englishes)の変容』太成学院大学紀要第12号 pp.91-96
- 森山卓郎(2009)『国語からはじめる外国語活動』慶応義塾大学出版会
- 森住衛(1992)「<ことばの教育>とは何か」『英語教育中学編』No.13 三省堂
- 吉岡乾(2017)『なくなりそうな世界のことば』創元社